

東京大空襲より72年

山口智英子 鹿沼市

72年前の記憶となると、定かでないことが多い。今まで若い時には何度か伝えようと思ったが、思い出すのも恐ろしくて、書留めるのも嫌なときがありました。でも今残さないと、後の人々に伝えられぬと思い、書き始めました。

私は東京都江東区深川常盤町に住んでいました。父が生存中は呉服屋を営んでおり、店の間口も広く、2階には洋風の窓があり、開店祝いの中には、その窓を大きく開けました。チンドン屋さんを頼んで賑やかにお祝いをしたことをはっきりと憶えています。2階の広間には呉服の反物が入っている大きな箱が重なっており、子供の頃はそこの中にあつたウコンの大きな風呂敷をかぶつて、よく従兄弟や姉達とかくれんぼをして遊んだものでした。



父が亡くなり、昭和の木綿の大暴落などで日本橋の間屋街が軒並み倒産。それに煽られて我が家も呉服屋を閉じ、母が商売を続けるために糸や毛糸・布地や和装小物を扱う店に変わりました。広い店はいらないので、店の半分は写真屋さん

貸すことになりました。呉服屋時代にあつた壁いっぱいの鏡の一つは母の店に、もう一つは写真屋の姿見になりました。母が開く店として女性らしい綺麗な商売を考えたようで、入口の片方はシヨウウインドウで飾ってありました。その頃私は小学校1年生でした。お店は深川の一等地であり、店前の通りはお正月やお盆にはそれは賑やかな人通りでした。家は半分になつても奥行きが長く「うなぎの寝床」と言われて、お店から長く続いた部屋は庭まで真つ直ぐにのびていました。

私が女学校の頃、大東亜戦争で日本の領土に敵の飛行機が偵察に現れるまでになりました。夜も着替えず服のまま横になり、いざというときには、そのまま逃げられるように、家の中にゴザを長く敷き、靴も履いたままでいました。3月の陽気はまだまだ寒くて、戸や障子を開け放つと家の中も外と同じくらいの温度でした。でも、これは町内の決まりごとだったので仕方ありませんでした。

3月9日の夜空はサーチライトで照らされ、異様な雰囲気を感じました。敵機を見逃すまいと右往左往する光の交差で、まばゆいばかりでした。昭和20年3月10日。空襲警報が鳴り、頭上には敵機B29の轟音がうなつていました。その音でこれは普通の数ではないことがわかりました。逃げるときに母が「一人ひとり小さいバケツを持ちなさい。

い。防火用水がどこの家の前にもあるから、その水をかぶりつこしよう」と言いました。今考えると、明治生まれの人は落ち着いていたと思います。低空で飛ぶ敵機は親子焼夷弾をいたるところに落として、あつという間にあちこちから火の手が上がりました。我が家の2階の屋根と物干し場からも火が上がりました。はしごをかけてあつたので、上から姉、私、母とバケツリレーで消し止めましたが、周囲はもう手の出しようがないほどあちこちで炎が広がっていました。

町内のあちらこちらで男性たちの「逃げろ！」の声。家の前の防空壕をあらため、水に濡らしたむしろを扉に掛け、その上から土を乗せて3人でこの前の焼け跡(区役所通りになりました)を頼りに逃げました。火の粉を防ぐためにバケツの水を掛け合いましたが、冷たいどころか、周囲の熱さであとからあとからどんだん乾いていくのです。

電車通りを渡り、向こう側の区役所通りに着くと急に風向きが変わり、目の前は煙でいっばいになりました。私は「もうダメだ」と言い、母の後ろにしゃがみ込みました。そのとき1頭の馬の蹄の音が煙の中からこちらに近づいてきました。とつさに母が叫びました。「今だよ！馬は火を避けるというから、馬の行く方について行こう！」後から考えると私はその馬がどうしても白馬に

思え、神様のお助けのように思えてならないので
す。馬の行く方向に進み、電車通りを左にまっす
ぐ進むと、深川の警察署がありました。その前に
巡查が一人、メガホンを持って立ち、「向こう側に
渡れ」と指示していました。そこは清澄公園の入
り口で、右側は市営のアパート、長く立ち並ぶ建
物が続き、奥の左手には図書館があり、その奥に
は有名な清澄庭園がありました。その庭の緑深い
木立は火を避けていました。建物の近くに逃げた
人たちは建物に火が付き池の水をかぶりながら
助かった様子でした。その晩、そこで巡查の「右
に寄れ」「左に寄れ」という指示に従いながら動き、
私たちは助かったのです。明け方寒くなると、
公園前のアパートが燃えてまだ炎が残っている
所で、皆、暖を取るような始末でした。

東の空がしらしらしてくると薄煙のぼやっと
する中に太陽がのぞき、その紅蓮の異様な色を見
た時に、私は「ああ、やっと生きられたのだ」と
思いました。隣にいた母は疲れた顔も見せず、次
の行動を考えているようでした。

公園を出ると道路には無数の屍がゴロゴロと
転がり、目を覆うような惨状に息もつけないほど
でした。その屍をまたぎながら歩き、家の方に向
かいました。昨夜逃げる途中で姉とはぐれてしま
い、まだ会えずにいたので心配でなりません。家
に向かおうとしても、途中の高橋の橋が燃えてし

まって通れないことがわかり、左へ巡り清澄町か
ら高橋の一つ向こうの萬年橋に向かいました。そ
の途中には父の墓があるお寺がありました。「こ
こにお姉さんが寄ったかなあ？」と思い、寺の門
から左を見るとそこには死人の山があり、母と私
は思わず手を合わせました。

やっと萬年橋を渡り、右に渡り、我が家の方向
へ向かうと見渡す限りの焼け跡。その焼け跡を向
こうからこちらへ歩いて来るのは、姉ではありま
せんか！ 急いで駆け寄り3人で抱き合って喜
びました。そこで町内の人2人くらいにも会いま
した。

私たちは3人は母の姉の家に向かいました。伯母
の家は緑町で釜善というお茶問屋を営んでいま
したが、そこへ着くまで、また着いてからも焼け
跡はずっとどこまでも続いていました。親戚の安
否を確認する事は出来ず、探す手立てもありませ
んでしたが、焼け跡に大きな黒い金庫が立ってい
たので、そこに落ちていた石で「深川全員無事」
と記して今度は母の妹の所に向かいました。叔母
の店は京橋にあり、その途中には私たちの氏神様
である神明神社がありました。神社に着くとその
鳥居の真ん中に母と子どもが神社に向かつて膝
まづき祈ったままの姿で真っ黒こげになって固
まっていました。思わず手を合わせ、また夢中で
歩き続けました。すれ違う人は帽子の陰から顔の

皮膚が焼けただれてぶら下がっている人や、足を
怪我して引きずるように歩く人など、言葉では表
せない光景でした。

叔母の家は京橋の店も西荻窪の自宅も焼けず
に残っており、伯父やお店の人たちが喜んで迎え
てくれ「まずお風呂に入って着物を替えて」と世
話を焼いてくれました。傷痍軍人として一時帰宅
していた従兄弟がおり、その人と一緒に翌日、深
川に向かいました。

スコップを持ち、中央線で両国まで、その後は
歩いて家に向かいました。あちこちの防空壕には
そこに入って亡くなった通行人がいたようで、路
上ではたくさんさんの屍がまとめてトラックに積ま
れていました。我が家の防空壕には誰も入ってい
ませんでしたが、中は荒らされており、風呂敷包
が一つ残されていただけで、鍋釜や家財道具はす
べて盗まれていました。焼け焦げた風呂敷包は呉
服屋時代の手ぬぐいをたたんで重ねておいたも
のでした。母は店に来た出征兵士のお客をみると
「うちは女の子だけでお国のためにご奉公でき
ないので、これをお持ちください」と言って、そ
の手ぬぐいを差し上げていたのです。当時配給さ
れる手ぬぐいはスフが入っていました。差し上
げたものは木綿だったので喜ばれたようです。出
征された後、何人かの兵隊さんはお札の手紙を下
さり、私はその方たちにお手紙を入れて慰問袋を

送って差し上げました。焦げてしまった手ぬぐいは、母が良いところだけを縫い合わせて雑巾にして使いました。

私たちは西荻窪の叔母の家に一月ほどお世話になり、私はそこから虎ノ門にある軍需省まで通い、仕事の残務整理や役所の手続きなどをしました。その後叔母の家族とともに、母の生家である茨城県の下館に疎開しました。下館では叔父の知人宅に、元は養蚕をしていた大きな家の一階と二階に分かれて住みました。疎開先での生活は慣れない事ばかりで大変でしたが「住む場所があるだけありがたい」という思いでありました。しかし太田（群馬県）の飛行場を狙って行く敵の艦載機による機銃掃射が続き、その恐ろしさはつい最近まで夢に見たほどです。

この戦争で、私が生き残ったことで、現在孫11人、曾孫7人と広がっています。これからのように広がっていくかわかりませんが、戦争のない平和な世界になるように祈っております。

東京大空襲について

東京大空襲は、第二次世界大戦末期にアメリカ軍により行われた、東京に対する焼夷弾を用いた大規模な戦略爆撃の総称。日本各地に対する日本本土空襲、アメリカ軍による広島・長崎に対する原爆投下、沖縄戦と並んで、都市部を標的とした無差別爆撃によって民間人に大きな被害を与

えた。早乙女勝元によれば、空襲としては史上最大規模の大量虐殺とされる。

東京は1944年（昭和19年）11月14日以降、106回の空襲を受けたが、特に1945年（昭和20年）3月10日、4月13日、4月15日、5月24日未明、5月25日、26日の5回は大規模だった。その中でも「東京大空襲」と言った場合、死者数が10万人以上の1945年3月10日の空襲（下町空襲）を指すことが多い。この3月10日の空襲だけで罹災者は100万人を超えた。（ウィキペディアより引用）



上…焦土と化した東京 画面一番下が国鉄両国駅、右奥が隅田川、見えている橋は手前からトラス橋時代の新大橋と吊り橋時代の清洲橋。



下…焼け焦げた遺体の山（写真…ウィキメディア・コモンズ）